

名古屋市博物館だより

編集・発行／名古屋市博物館 〒467-0806 名古屋市瑞穂区瑞穂通1-27-1
TEL (052) 853-2655 FAX (052) 853-3636 <http://www.museum.city.nagoya.jp>

平成27(2015)年4月1日発行 (年4回1・4・7・10月)
3,800部発行 無料 古紙パルプ配合再生紙使用



猫ブーム到来！

家族の一員として愛されている飼い猫はもちろんですが、猫カフェや猫の写真も話題ですよ。一方、そんな“リアル”な猫だけではなく、ご当地のゆるキャラ、アニメ、コミック、ゲームの世界でも、たくさんの猫のキャラクターが現れて時代を席卷してきました。

そもそも猫は、古来より日本人が愛玩し、私たちの暮らしに寄り添ってきた動物です。そのため人との関わりの中で物語や絵画に描かれてきましたが、特に江戸時代後期には現代と同じように「猫ブーム」がたびたび到来し、歌舞伎や合巻本、浮世絵の画題に多くとりあげられました。そこに登場する猫たちの姿は実に変幻自在です。

ときには美人の魅力を増幅させるマスコットとして、ときには恐ろしい妖怪として、はたまた人間のような姿で、さらには福を招くシンボルとして縦横無尽に江戸の世界を駆けめぐっています。

「いつだって猫展」では浮世絵を中心として、江戸時代に巻き起こった「猫ブーム」の諸相をご紹介します。きっと私たちが猫に抱くイメージの多様性に改めて気づかされることでしょう。自由奔放な姿に思わず笑みがこぼれ、猫好きはもちろんのこと、そうでない方も愛らしい江戸猫のとりこになること請け合いです。

ええ、いつだって私たちは猫に夢中なのです。

(津田卓子)

特別展 名古屋めしのもと 展示準備ノート

～思い出によって展示を作る～

名古屋の食文化を調べる

最近の名古屋の観光ガイドやパンフレットをみると、必ずと言っていいほど、みそかつ・みそにこみ・きしめんなど、いわゆる名古屋めしが紹介され、その人気がうかがえます。

平成27年12月から開催する特別展「名古屋めしのもと」では、商業的に発展した名古屋めしをきっかけに、家庭や地域で伝えられてきた食文化も含めた名古屋の食文化を紹介します。名古屋めしを特徴付ける豆みそ・たまりしょうゆを紹介し、市民が経験した食の思い出を振り返りながら、食文化の背景や特徴を探ります。

その一環として、平成26年の4月からアンケート調査を実施して情報を募り、あわせて聞き書き調査や映像記録など現地調査を進めています。今回の準備ノートでは、アンケート調査によって市民の思い出を情報として集約することが、どのような意義を持つか考えてみます。

調べて分かってきたこと

現在までに多くのご回答をいただき、興味深い情報が集まっています。たとえば具入りのごはんには、名古屋市内に限っても様々な言い方があります。「まぜごはん」「あじごはん」の他に「かきまわし」ということもあり、南区などでは「たまりめし」、緑区大高町では「とうたけ」とも言われています。

また、東海地方ではお祭りなど特別な日に、巻きずし・あげずし・ちらしずしとともに、4、5段の



サバにご飯を入れて作るすし
守山区中志段味 野田雅子氏調理

木枠を使う押しずし（箱ずし）も作ります。限られた地域で作られるすしとして、守山区などではサバなどの魚にご飯をつめて作るすしがありました。

これらの地域差は、提供していただいた情報をまとめることで明確になります。これまでに調べられたことのあるテーマもありますが、さらなる情報の蓄積が期待できます。

また、名古屋で正月の雑煮といえば、すまし汁に四角いモチ、もち菜を入れた雑煮が一般的です。一方で、人参やかかしわ（鶏肉）などを入れるという情報、昔は雑煮ではなくぜんざいを食べることが決まっていたという情報もありました。

このような違いは時代や個人の考えによって生じるのかもしれませんが、あるいは、情報が蓄積されることで、今まで見えづらかった地域的な傾向が明らかになるかもしれません。

従来の調査研究では特定の伝承者の経験が地域の食文化のモデルとして記述される傾向にありました。これに対して、今回の調査では特定の時代・人物の経験にかたよらずに情報を集め、地域の食文化の姿を探りたいと思います。

思い出を共有する

調査の結果は展示内容に反映させます。また、会場内でも分布地図など、専門的な知識がなくても分かるような形で情報を提示します。さらに、会期中も展示テーマに合わせてアンケート調査を実施し、リアルタイムで情報を更新します。

このように、展示内容と調査を合わせることで期待することが2つあります。1つ目は来場された方々が、展示やアンケート用紙をご覧になることで自身の経験を思い出すことです。特別展を観覧することが、身近な食文化を振り返るきっかけになればと思います。

2つ目は、思い出として募った情報を集約し、博物館が新たに地域の食文化像を提示することです。この時に、一方的に情報を得るのではなく、博物館と調査にご協力いただいた方の間で、あるいは来館された方の間で思い出を共有する新しい参加型の展示を作りたいと考えています。（長谷川洋一）

博物館内でアンケート調査を実施し、情報の一部は分布図の形で掲示しています。博物館ホームページ上にもアンケート用紙を掲載しています。機会がありましたらご協力ください。

秀吉に挑む

—『豊臣秀吉文書集』編集記—

平成27年（2015）2月、名古屋が生んだ天下人、豊臣秀吉が発信した文書を一挙に集めた『豊臣秀吉文書集』の第1巻が発売されました。これは名古屋市博物館が中心となって、秀吉研究に携わっている研究者とともに編集したものです。今回は、この文書集ができる過程における、いわば秀吉と編集に携わる我々との戦いの過程をお伝えします。

戦いはここから始まった

武将が出した文書を多く集めて年代順に並べると、その武将の活躍を克明に知ることができます。文書をたくさん集めて、丁寧に整理して文書集を作れば、戦国時代の歴史に対する理解をより深めることができます。同じく天下人でも、織田信長・徳川家康は早くに文書集が作られていました。これに対し秀吉は、一人の武将が出した文書の数としては日本史上最多の7000通も確認できるため、一挙に集めることが難しく、なかなか文書集という形には至りませんでした。しかし、文書集刊行は決してあきらめられていたわけではありません。

平成元年（1989）、三鬼清一郎先生（名古屋大学名誉教授）が、長年の秀吉研究の成果として『豊臣秀吉文書目録』を刊行されました。これを契機に、秀吉の文書集を作る準備が整えられていきました。さらに我々の「名古屋が生んだ天下人、豊臣秀吉の文書集を作ることは、名古屋にある博物館の使命ではないか」という思いに全国各地で秀吉研究に携わる先生方が賛同してくださいました。そしてついに、平成24年（2012）、ご賛同いただいた先生方とともに、文書集刊行の実現に向けて、名古屋市博物館に編集委員会を設立しました。こうして文書集を作るための、秀吉と我々との戦いの火ぶたは切って落とされたのです。

現在の戦況

秀吉との戦いつまり編集作業はまさに「気が遠くなる」という言葉を実感させられる作業です。

まず文書を集めて整理して、書かれている内容を読み解かねばなりません。一言で“文書”と言っても、伝わった形は様々です。本物の文書はもちろんのこと、すでに本物が失われ、元の姿がわからないものに関しては、写真や活字、本物を写し取ったものなどから、本物の文書に書かれた情報を見出していき

ます。そしてこれら一通一通に対して解読を試みますが、文字がくずれているものや損傷が激しいものはとても読みにくく、内容を正確に把握することが非常に困難な文書は少なくありません。

さらに厄介なことに、“文書”の中には秀吉にあやかるため、後世の作為が加わった文書が混在しています。内容をよく吟味して、文書として正しい情報が書かれているのか見極めなくてはなりません。

次に、7000通もある膨大な文書に書かれている内容と年月を、当時の状況と照らし合わせて詳しく検討し、該当する年月に文書が本当に存在しているのか確認していきます。特に年月がわからない文書については、文書に書かれている情報の中にある、花押や文書の最後に見られる署名（名乗り）の表記、現在の「敬具」などにあたる書留文言に見受けられる変化などを手がかりとして、文書が書かれた年月を推定します。

年月がわからない文書の検討は、編集において最も重要な作業です。近年、研究が進み、より精緻な推定を試みることができるようになってきました。もし書かれた年月を1年でも間違っただけで解釈してしまえば、歴史認識が変わってしまうのですから、何度も検討を重ねて慎重に作業を進めています。



秀吉研究者による熱き議論の行方はいかに…

戦いはまだまだ続く

こうして、ようやく生み出された『豊臣秀吉文書集』。第1巻での秀吉はというと、織田家の家臣から一生懸命活躍して、出世を遂げ、「本能寺の変」を乗り越えて、ようやく天下統一を目指し始めました。次巻以降も、教科書でおなじみの「刀狩」・「太閤検地」に加え、重大な出来事が数多く控えています。秀吉と我々との戦いはまだ始まったばかり。一つ一つの戦いを乗り越えて、全9巻の完成を目指して頑張ります。ぜひお手に取ってご覧ください。

（星子桃子）

猫展

いつだって猫展ニャース!

歌川国芳
「たと糸尽の内」部分
嘉永5年(1852) 個人蔵
※猫に関する慣用句をひねりをきかせて表した浮世絵の一例。「猫も食わない」という慣用句を描く。



えへ、ただいま入りました情報により
ますと、「いつだって猫展」の準備を
進める名古屋市博物館で動きがあった
模様です。現場の不食猫子(くわずねこ)
さん、お願いします。

キャスター：鷺坂伴内(きざさかばんない)

こちら、現場の不食猫子です。私は
今、名古屋市博物館にきていますが、
今春開催の「いつだって猫展」の全
貌が明らかになりつつあるなかで、
猫と人にとって大変興味深い事実が
判明したようです。

レポーター：不食猫子(くわずねこ)



歌川国芳「三段目」部分
天保12～13年(1841-42) 頃
個人蔵
※仮名手本忠臣蔵に登場する鷺坂
伴内を擬人化。
実は役者の似顔絵になっている。

にゃんと江戸時代にも「猫ブーム」があったというのです!

化ける猫ブーム

猫は人間のいいなりにはなりません。
また光によって瞳孔の大きさが変わる
など不思議な生態を持っています。

そのためでしょうか、人間は「化け猫」
という存在を生み出しました。



歌川国芳「日本駄右門猫之古事」弘化4年(1847) 個人蔵



こちらは歌舞伎の舞台を描いた浮世絵です。弘化4年
(1847)に上演された『尾上梅寿一代噺』に取材していま
すが、中央の三代目尾上菊五郎という役者、20年前に「化け猫」
を演じて大評判となつて以来、この役を得意としたよう
です。十二単を着た老婆が行灯の油をピチャピチャとなめる
姿は三代目菊五郎によって定番化されたとのこと
です。

なつかしの怪猫映画 「怪談佐賀屋敷」鑑賞会

4月29日(水・昭和の日)

①10:00～(9:30開場)

②14:00～(13:00開場)

会場：展示説明室(当日先着100名)

本展覧会チケット(半券も可)が必要

地域ニャース
伝馬町で
「猫また」
目撃される!

安政3,4年(1856,57)頃に成立した『尾張霊異記』によると、伝馬町(現名古屋市熱田区)
で「猫また」が目撃されたようです。

【目撃者の井筒屋久兵衛氏談】

「ええ、なぜか竿に掛けておいたはずの手ぬぐいが縁側に落ちていたことが続いて…。
不思議に思っていたんですが、ある晩、5、6匹の猫が手ぬぐいを被って踊る姿を見てしまっ
たんですよ。その上なんと、そのうちの1匹は我が家のクロだったんです!

え?どうしたかって?その場はそのままだったんですけど、翌日知り合いの医者(せき)を誘って、
こっそり見物してみたんです。家内(うち)も出掛けてて寂しかったもんでね。ところが、そいつが咳
をしましてね、そのとたん、みんなパーッと逃げてしまったんですよ。」

ぎ じん 擬人化猫ブーム

天保12、13年(1841,42)頃、江戸に大きな「猫ブーム」がやって来ました。猫を愛してやまない歌川国芳が次々と猫を擬人化した浮世絵などをたくさん発表したのです。人間は猫を通して、自分たちの世界をのぞくことが好きようです。

この浮世絵は天保12年3月に大評判となった菊川国丸の曲鞠が基となっています。国丸の曲芸光景を、ひとひねりさせ、擬人化された猫で表現しています。さすが国芳先生！



歌川国芳「流行猫の曲鞠」
天保12年(1841) 個人蔵

招く猫ブーム

猫はラッキーアイテムともなりました。嘉永5年(1852)に起こった「丸め猫(まるしめのねこ)」ブームです。「丸め猫」は「福をまるまる、独りじめ」できる人形の意味で、今の招き猫のご先祖です。

この人形は江戸にあった尾張藩屋敷のゴミ捨て場から見つかりました。当時のブームの最中に制作された丸め猫と特定できる貴重な資料とのことです。あ、最新情報です！どうやらこの猫の誕生秘話を、あの人気猫マンガ家くるねこ大和さんが同展図録に寄稿している模様です！



作者未詳「丸め猫」
嘉永5～安政6年
(1852-59) か
新宿区教育委員会蔵



ウム。ブームは繰り返すものだが、まあ、われわれ猫が放つ魅力は、つねに人間を引きつけてやまないのでしょうか。ニャハッハッ。



このところ、人間の間では我らが主役のマンガやゲーム、写真などがブームとなっているようです。つまり約200年前にも人間界では同じことが起こっていたということになるのでしょうか、評論家の庄屋猫之介先生？



歌川国芳
「たとえ尽の内」部分
個人蔵
※「猫と庄屋にとらぬはない」という慣用句を描く。

評論家：庄屋猫之介 (しょうやねこのすけ)

なるほど。同展では他に「おもちゃ絵」の猫ブームも取り上げるようです。今後も注目したいと思います。以上、ニャースキャスターの鷺坂伴内(さぎさかばんにやい)がお届けしました。

特別展「いつだって猫展」情報

主催/名古屋市博物館、中京テレビ放送

会期 2015年4月25日(土)～6月7日(日)

開館時間 9:30～17:00(入場は16:30まで)

休館日 4月27日(月)、28日(火)、5月11日(月)、18日(月)、25日(月)、26日(火)、6月1日(月)

観覧料 一般1,300(1,100)円 高大生900(700)円 小中生400(200)円

※()内は前売および20名以上の団体料金。※前売券は4月24日(金)まで名古屋市博物館、主要プレイガイド、主なコンビニエンスストア、チケットぴあ(Pコード=989-353)、セブンイレブン、ローソンチケット(Lコード=45626)、イープラスなどで販売。※名古屋市内交通局の一日乗車券・ドニエロエキップを利用して来館された方は100円割引。※身体等に障害のある方は手帳の提示により、本人と介護者2人まで当日料金の半額。※各種割引は重複してご利用いただくことはできません。ご了承ください。※作品保存のため室温を低めにしております。上着などをお持ちいただくと便利です。

《講演会》午後2時から(午後1時30分開場)、講堂にて(先着220名)。12時半より聴講整理券を先着順にて配付(1名様1枚限り)。

聴講には本展チケット(観覧済み半券可)が必要
5月2日(土)「国芳は“猫”である。」講師：神谷 浩(名古屋市博物館副館長)
5月16日(土)「江戸の猫ブーム」講師：津田 卓子(名古屋市博物館学芸員)

詳しくは公式サイトにて

猫展 名古屋

検索

【うちの猫自慢】

愛猫の写真写真をプリントで会場にお持ちくださった方は観覧料100円割引。
※なお写真は館内で掲示し、返却いたしません。※前売・各種割引との重複不可。

【招き猫絵付け体験】(事前応募)

5月9日(土)、10日(日)

各日2回、定員各回50名

①10:30～、②14:30～

会場：1階展示説明室

参加費：500円+本展チケット

(観覧済み半券可)

※往復はがき、または名古屋電子申請サービスにて事前申込。応募者多数の場合は抽選。応募は1通につき2名まで。

★応募締切4月19日(必着)

よみがえれ文化財！

ただ今修復中

名古屋市博物館では、「よみがえれ文化財」として、平成25年4月から博物館資料を修復・活用するための寄附を募っています。現在、皆さまからの寄附により、伊勢参宮図屏風の修復などをおこなっています。その様子を少しお知らせします。

伊勢参宮図屏風の修復

修復は、まず土台となる木の骨組から絵を外し、画面にたまった埃や汚れを洗い落とした上で、絵の具が落ちそうな部分や虫食いのためにできた穴を補強し、新調した骨組に貼り直して完成します。

骨組や補強のために貼られた裏打紙^{うらうちがみ}から、絵が描かれた紙^{ほんし}（本紙）を剥がしました。その結果、紙だけではなく、骨組の木枠にまで虫食いが進んでいることがわかりました。屏風が崩れる前に手当することができて良かった、と胸をなでおろしました。

次の作業に進む前に現状の調査として、今回は東京文化財研究所の協力を得て「蛍光X線検査」を実施しました。この検査では、使用されている絵の具の元素が分かります。本紙を水平に置き、分析装置を画面1cmほどのぎりぎりのところまで近づけて計測します。画面にダメージを与えないよう、気疲れのする作業でしたが、その苦労あって、いろいろと分かってきました。

例えば、鳥居の額束^{ぬかづか}や貫^{ぬき}の部分の描写です。よく見ると金で塗りつぶされているようにみえます。もしそうであれば、一度描いたあと伊勢神宮の鳥居の形により近づけるため、修正が施されたのではないかと考えました。今回の分析では実際にこの部分から、金（Au）だけではなくカルシウム（Ca）つまり白い絵の具の胡粉^{ごふん}が検出されました。つまり「鳥居の一部分が金で修正されている」という推測が、



写真1 蛍光X線検査の様子



写真2 ○印部分、上から金で塗り直している

科学的に裏付けされたことになります。もしかしたら、一度この屏風が納品されたあとに、発注者から「伊勢神宮の鳥居の形はこのような形ではない。」とクレームが入ったために修正したのかもしれませんがね。その他にも、群青^{ぐんじょう}を使用していると思っていた青色の絵の具が、色味を繊細に調整するためでしょうか、実は群青と鉛白^{えんぱく}を混ぜたものであったことがわかりました。このように本屏風が細部まで気を配って、丁寧に描かれていることを再認識することができました。

お披露目します

伊勢参宮図屏風や古墳時代の鉄刀など、今回寄附をもとに修復した資料、またデジタル化した名古屋の街を記録した写真などを、6月2日（火）から7月5日（日）に常設展フリールームで展示します。ぜひよみがえった姿を御覧ください。

円空仏、芭蕉像、刀剣、地図など博物館が修復・活用していかなければならない資料は多数あります。今後も資料のすばらしさ・大切さを伝えることで、広く皆様からの理解・応援の輪を広げていきたいと思っています。

（瀬川貴文・津田卓子）

平成27年1月末までの寄付者名

（公開に同意された方のみ、受付日順、敬称略）

三嶋屋 細野豊晴、林幸司、木越律子、
富士シリシア化学株式会社 名古屋営業所、山田清子、
山田克哉、株式会社 三勇商店、飯田和子、大野勝藏、
瑞穂通商店街振興組合、伊藤正裕、磯貝紀枝、近藤道子、
加藤博司、日本美術刀剣保存協会名古屋支部、
カニエプロパン株式会社 代表取締役会長 黒川公明、
榊原康司、佐久間洋一、加藤玲子、ITC 名古屋クラブ、
加藤景之、株式会社 カトウスタジオ、
株式会社 中央工芸、株式会社 ニホンディスプレイ、
玉林寺、伊勝八幡宮、福島佐千男、吉田周平

匿名含め、のべ45名

世代をつなぐ博物館に…… ～くらし体験事業を通して～

今年は250校来館！

今年もくらし体験事業が行われました。小学3年生の社会の授業に合わせて、博物館で昔の道具についてメモを取り、実物に触って、学習を深めてもらうのがくらし体験事業です。今年は去年と同じ250校、17,000人以上の子どもたちが博物館にやってきました。市内の小学校のおよそ93%——つまり、市内の小学生のほとんどが、小学校にいるあいだに一度は博物館に足を運んでいるということになります。これは博物館にとって、ちょっとした自慢です。

毎年くりかえされる事業ですが、そのたびに子どもたちと接しておもしろい発見をするのが、楽しみなところですよ。今回はその一例をご紹介します。



体験の様子 砂田橋小学校

子どもにインタビュー

この期間、展示室では子どもたちがもくもくと道具をメモしています。洗濯板、石臼、火鉢……。子どもたちにとって、ここに並んでいる道具はどう映っているのでしょうか？熱心に書きとめているところを割って入るのは気がひけましたが、隙をみて話しかけます。

「この火鉢って、見たことある？」すると、たい



熱心にメモをとる子どもたち

ていの子どもは急に声をかけられてギョッとしますが、あかるく答えてくれます。「あるよ。おばあちゃんの家でね、見たことある。」

今は使っていないけれど、おばあちゃん家に置いてあるのを目にした、とのこと。子どもたちにとって、ここに並べられた道具は、まったく未知のものではないようです。意外でしたが、いろんな道具で試したところ、「おばあちゃん、おじいちゃんの家で見たことがある」という言葉は、わりあい聞く答えでした。

「じゃあ、この火鉢、みんなの家では何に変わっているのかな？」——エアコン、という答えを期待して聞いたのですが、答えはわたしの予想を超えたものでした。「ぼくの家ではね、“ゆかだん（床暖房）”。」

ところ変わって…

子どもと自分との思考の違いに戸惑いましたが、つい最近おなじような経験をした、と思い出しました。ある小さな町で、80代のおばあさんに「昔、うれしかったエピソードは？」と質問したときのことです。

おばあさんは、喜んだことねえ、と戸惑いながら答えてくれました。「わたしが子どものころは戦争中だったし、着るものも少なかったねえ。くつ下なんてないし。“わらぐつ”履いたり……。」

わたしはこの質問で、きれいな着物を作ってもらったとか、そういう答えを期待していました。しかし、返ってきたのはわらぐつの話。わらぐつは、ワラで作った長靴のような形をした履物です。「それがうれしかったエピソード？」と思い、もう一度くわしく聞くと、わらぐつは作る人が近所に1人しかおらず、なかなか手に入らない、だからそれがもらえたときうれしかった、と教えてくれました。

わらぐつは今の長靴に似ているので、わたしは使いかたも今とおなじで、みんな自分のわらぐつを持っていて雪が降ればこぞって履いていたものだと浅はかにも思い込んでいました。しかし、そうではなかった…

わたしと子どもたち、そしてわたしとおばあさん、それぞれおなじ今を生きていても、くらし経験が違うため、当たり前ですが、とらえ方にもズレが生じてきます。

火鉢について聞いた子は、おばあちゃんの家で見た火鉢の使いかたを、この日博物館に来て初めて知ったということでした。もしも、そうした世代間のズレを埋める橋渡しとして博物館がきっかけとなるなら、こんなうれしいことはありません。

(佐野尚子)

資料紹介

なかばやしちくとうけしよういん
中林竹洞家所用印

江戸時代後期～平成 42顆 受贈

中林竹洞（1776～1853）は名古屋を代表する南画家である。本資料は、竹洞とその家族が用いた印章・印材であり、このうち竹洞の印章の中には、若年時から使用した印章や、代表作に押される印章などの基準的な印章が多く含まれる。



中林竹洞は安永5年（1776）、桑名町（中区丸の内）の医師の家に生まれた。長男ではあるが、医業は継がず、画家の道を選んだ。師は、尾張における南画の先駆者である山田宮常である。また、中国絵画のコレクターであった富豪、神谷天遊の指導を受け、中国絵画の臨模にも努めた。30歳代半ばからは京都に移住し、京都画壇の主要作家として全国的な名声を得た。嘉永6年（1853）、京都で没。中国古典の様々な画家の画風を独自に解釈した、山水画の名手として知られる。また、芸術論に関する著作も多く、今日ではこの面での評価も高い。

本資料は、晩年の竹洞をささえた娘で、同じく南画家の中林清淑（1831または1829～1912）の家系に伝わるものである。竹洞自身の印章のほか、娘の清淑と、その夫の三浦湘雲（1818～90）、曾孫女かとおわれる青洞という人物の印章が混在する。

竹洞の孫弟子にあたる兼松廬門（1864～1917）が記した、竹洞研究の基本書『竹洞と梅逸』によれば、竹洞は7名の子宝に恵まれ、4名が成人した。長男竹溪（金吾）、次女町、三女清淑（邦）、三男喜久之助である。中林竹溪（1816～67）は父竹洞と父の旧友である山本梅逸に絵を学び、典雅な山水画や写実を取り入れた人物画を描いている。竹溪と他の三人は母親が異なり、年も離れていた。天保9年（1838）、竹洞は家督を竹溪に譲り、他の子をつれて真如堂（現・京都市左京区）前に隠宅を構えた。老

後は清淑を頼りとし、年頃になった清淑に、竹溪が縁談を持ってきたこともあったが、竹洞の世話を理由に断っている。嘉永6年（1853）、78歳で竹洞が没すると、竹溪は強引に清淑の縁談を進め、京都西町奉行浅野長祚の家士であった三浦湘雲に嫁がせた。安政5年（1858）、長祚が小普請奉行に左遷されたのを機に、清淑らは江戸に移住したと思われる。清淑は晩年、京都に戻り、弟の新林喜久之助の孫娘を養孫に迎えた。この娘は清淑の没後に他家に嫁ぐこととなり、実妹を養女として中林姓を継がせた。印章の寄贈者はこの家系のご子孫である。

寄贈者宅では、どの印章が誰の使用印であるかわかっておらず、整理したところ、竹洞の印章が12顆19面、清淑の印章が8顆9面、湘雲の印章が3顆3面、青洞の印章が5顆6面、使用者不明の印章が11顆11面、用途不明の木印が1顆1面、篆刻していない印材が2顆0面の合計42顆49面であった。顆数と面数が一致しないのは、同じ印材の天地に印面が彫られているものや、未使用の印材があるためである。天地に印面のあるものは、片面の篆刻に失敗して彫り直したのではなく、両面が使用されている。写真の「成昌之印」「字伯明」白文方印などは同じ絵画作品の落款で組み合わせて使用される例が多い。



天地両面の印「成昌之印」



反対側「字伯明」

さて竹洞が絵画、著作に使用した印を数えていくと、生涯に40種ほどの印を使用していると言われる。今回、その約半数の印が発見されたわけだが、初期の基準印である、「筆樵」朱文方印・「竹洞」白文方印（これも天地両面である）、代表作「青緑山水図」（天保6年（1835）・県指定文化財）に用いられる「竹洞自作」朱文方印などが含まれており、中核部分を収集できたといえよう。

今後残りの竹洞の印章や、ほかの尾張の画家たちの印章が発見されることを期待したい。（山田伸彦）

この資料は、常設展フリールーム「中林竹洞」（3月25日（水）～4月26日（日））で展示します。また、研究紀要第38巻（4月発売予定）に全点の印譜を掲載します。